

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 18 日現在

機関番号：32699

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520692

研究課題名（和文） 丹鶴城旧蔵幕府史料の研究

研究課題名（英文） Research on Edo government documents formerly in the holdings of Tankaku Castle

研究代表者

松尾 美恵子（MATSUO MIEKO）

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：20072423

研究成果の概要（和文）：本研究は、紀州藩付家老の水野忠央が収集した当史料群の成立過程や伝来経緯を解明しつつ、水野忠央がなぜ幕府史料を収集したのか、その背景を検討したものである。他機関に伝来する幕府史料と比較し、当史料群の固有性を明確にするとともに、水野忠央の政治動向と関連づけて収集目的に迫った。また、研究会を通じ当史料群の中の個別史料を分析・検討し、幕府文書論の構築をめざした。今後、研究成果をまとめ、刊行する予定である。

研究成果の概要（英文）：The aims of this study were to investigate the process of the collection of these historical materials by Mizuno Tadanaka, a *karo* of the Kii domain, along with the particulars of the collection's later transmission, and to consider his reasons for assembling *bakufu* documents and the context in which he did so. The study makes clear the special features of this collection in comparison to *bakufu* documents handed down in other institutions and seeks to determine Mizuno Tadanaka's purpose in gathering the materials by considering his political views. In a study group which met as a part of the project, participants analyzed specific documents in the collection, and worked towards the construction of a framework for the study of *bakufu* documents. Publication of the results of the study is planned.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：江戸幕府・史料・文書・水野忠央・付家老・紀州・新宮・丹鶴城

1. 研究開始当初の背景

江戸幕府の史料に関する研究は、これまで幕府老中が発給する老中奉書、将軍の御内書、及び幕府日記の研究が、幕藩初期政治史研究と平行して進められてきた。また幕府文書を含む武家文書の体系的把握を試みた研究や、寺社奉行・奏者番の記録文書を幕府の情報管理のあり方とともに検討した研究もなされた。近年においては、江戸幕府が紅葉山文庫、昌平坂学問所、医学館などに収蔵していた図書、史料、美術品等についての総合的研究が行われ、各資料の成立、伝来、相互関連等についての検討がなされた。

本研究の対象である学習院大学図書館所蔵「丹鶴城旧蔵幕府史料」は、近年の調査により、極めて貴重な史料群であることが判明した。研究代表者らは当史料の影印での出版に着手し、2007年第一期(全6巻)、2008年には第二期(全9巻)を刊行した〔その後2009年に第三期(全7巻)、2010年に第四期(全8巻)を刊行〕。そして当史料群の成立・伝来、収載各史料の解説を執筆する過程で、研究をさらに深める必要性を痛感した。これまでその存在が知られていない当史料群について、史料学的、古文書学的に検討することにより、幕府史料研究をより一層充実させ、発展させることができると考えた次第である。

2. 研究の目的

学習院大学図書館所蔵「丹鶴城旧蔵幕府史料」は紀伊徳川家の付家老で、紀伊国新宮城(丹鶴城)主の水野忠央が収集した史料群の一部である。水野忠央の蔵書というと古典籍の叢書『丹鶴叢書』が著名であるが、忠央は江戸幕府の諸記録類も多数収集している。学習院伝来史料は老中らが政務を処理する上で必要な先例・規則、大名らからの問い合わせと回答の書留など、江戸幕府の日常政務・儀礼関係の史料が多く含まれており、日本近世史研究にとってきわめて有益な史料群である。本研究はこの史料群がいつ成立し、どのような経緯で学習院に伝来したのか、また水野忠央はいかなる意図、方法により幕府の記録類を収集したのかを追究するとともに、主要な文書の史料性格を解明することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、三方向から研究を進めたが、その方法はそれぞれ以下の通りである。

(1) 史料群の成立過程・伝来経緯の解明

本史料群は、①江戸幕府において生成・集積された史料群、②新宮水野家が所蔵していた史料群、③学習院に伝来した史料群の3つの性格が重層しており、その史料価値を見極めるうえで、この3段階に沿ってそれぞれの成立を考えた。

①については、他機関に伝わる幕府史料との比較検討が必須で、まず、国立公文書館内閣文庫や、国立国会図書館の旧幕府引継書、及び首都大学東京図書情報センター所蔵の「水野家文書」を調査した。

②については、新宮水野家の蔵書目録である『新宮城書蔵目録』(国立国会図書館所蔵)が基本資料で、なかでも第七冊には「御当家書」として、学習院所蔵の当該史料300冊を含む、幕府の記録類1,012点、6,147冊の書目が記載されている。この目録をデータ化し、分析することを通して、学習院所蔵史料の位置を確認した。また学習院以外に所蔵される当該文書の網羅的な追跡調査のため、平成21年度に新宮城(丹鶴城)址、新宮市立図書館、および和歌山県立図書館、同県立文書館などを調査し、併せて新宮城での保存・利用体制はどのようなものであったかを探った。

③については、幕末・明治初期における新宮水野家の蔵書の散逸と学習院への伝来経緯の解明のため、新宮市や和歌山市で収集した史料を検討し、また水野家の旧蔵書が所蔵されている都内諸機関を調査した。さらに新宮水野家の祭祀権を引き継いでいる水野家関係者からヒアリングを行なった。

以上の各地調査、収集史料の整理、分析には研究代表者と研究分担者の小宮山敏和が主にあたり、大学院生等、数人の研究協力者が助力した。

(2) 水野忠央の政治的役割と幕府史料収集目的の解明

本課題については以下の方法により研究を進めた。

①水野忠央の政治動向や幕政への影響力を検討するため、嘉永～安政期に幕政の中核にいた老中阿部正弘、大老井伊直弼らの関係文書を集積し、

とくに安政の将軍継嗣問題の際に、いわゆる「南紀派」の中心として紀州藩主徳川慶福（家茂）を14代将軍につけようとした活動を中心に検討した。具体的には、阿部正弘宛の忠央書状が収載されている「公紀私録」（『丹鶴城旧蔵幕府史料』所収）、『大日本維新史料 井伊家史料』（東京大学出版会）を用い、平成22年度には彦根城博物館所蔵の井伊家文書を調査し、活用した。また「大日本維新史料稿本」（東京大学史料編纂所所蔵）のなかから水野忠央関係の記事をデータ化した。

②『水戸藩史料』（吉川弘文館）、『昨夢紀事』（東京大学出版会）、『鹿児島県史料』（鹿児島県）、『尾張徳川家文書』（徳川林政史研究所所蔵）などにより、安政の将軍継嗣問題の際、「一橋派」として政敵であった徳川斉昭、松平慶永、島津斉彬、徳川慶勝らから、忠央がどのように見られていたのかを検討し、その人物像に迫った。

③先祖を同じくし、婚姻関係も持っていた浜松藩（のち山形藩）水野家との関わりに注目し、忠央の幕政における人脈の広がりを検証した。具体的には首都大学東京図書情報センター所蔵の「水野家文書」を調査し、活用した。

④同じ紀州家付家老であった安藤家、尾張家付家老の成瀬家・竹腰家、水戸家付家老の中山家の活動と忠央の政治動向とを前記史料や藩政史料等を用い、忠央の活動の特色を検討した。

⑤新宮市立図書館や和歌山県立図書館などで収集した史料を分析し、忠央と紀州藩政との関わりを検討した。とくに忠央と関係した国学者・教育者・文化人に注目し、水野忠央の文化・教育活動の実態と政治動向との関連性などを考察した。

⑥水野忠央の贈位関係史料（国立公文書館所蔵）を調査し、贈位申請の背景など具体的状況を検討した。

本課題は主として研究分担者の藤田英昭が担当した。

（3）当史料群に収録されている個別史料の史料学的検討

本課題については以下の方法により研究を進めた。

①第一期（全6巻）・第二期と刊行してきた『丹鶴城旧蔵幕府史料』所収史料の中から、老中奉書・御内書・伺・届など具体的事例を取り上げて、様

式、機能、特徴などを検討した。

②2009年に刊行した『丹鶴城旧蔵幕府史料』第三期（全7巻）、2010年に刊行した第四期（全8巻）に収載した史料について、個々に解説を執筆する過程で、老中奉書・御内書・伺・届など具体的事例を取り上げて、様式、機能、特徴などを検討した。

③以上の検討を通して、発信（大名）・受信（幕府）双方からの文書の流れを解明し、幕府の文書に対する意識や整理方法、幕政への活用方法などを検証することにつとめ、新たな文書論・アーカイブズ論を構築することをめざした。

④個別史料の具体的検討は、研究代表者と研究分担者に『丹鶴城旧蔵幕府史料』の解説を執筆してきた研究協力者が加わり、度々研究会を開催して、研究発表を重ねた。

4. 研究成果

（1）史料群の成立過程・伝来経緯の解明

①水野忠央が収集した幕府史料の性格を検討するため、首都大学東京図書情報センター所蔵の浜松藩「水野家文書」の文書を調査した。その結果、浜松藩水野家で、老中等の幕府役職に就任していたことに伴って作成されたと推定される文書は多数あり、水野忠央収集の幕府史料との親近性を窺うことはできた。しかし、水野忠央収集の幕府史料の原本と判断できるような史料は、今回の調査段階では未発見であることから、水野忠央が収集した幕府史料は浜松藩の「水野家文書」とは類似しつつもまったく別の史料であるか、大幅な再編集の行程を加えた史料であると推定され、水野忠央収集の幕府史料の持つ固有性や重要性が一段と明確化されることとなった。今後他機関の幕府文書とも比較し、考察を深めたい。

②新宮水野家の蔵書が地元に残存する可能性を求めて、新宮市・和歌山市で調査を行なったが、明確な手がかりはえられなかった。丹鶴城（新宮城）にあったとみられる文庫の位置も解明されていない。今後収集史料を精査し、手がかりをみつめていきたい。

③幕末・明治初期における新宮水野家の蔵書の行方に関して、明治10年頃福沢諭吉が新宮水野家の旧蔵書を中心に慶応義塾の図書館を建設しよう

とし、その目録を作成させていた事実が浮かびあがってきた(『慶応義塾図書館史』)。しかしその後の状況、現在の慶応義塾大学図書館蔵書との関係まで明らかにすることはできなかった。また國學院大学図書館に浜松藩(山形藩)水野家旧蔵図書が残存し、そのなかに「新宮城書蔵」の蔵書印のある図書があることが判明した(古山悟由「國學院大學図書館所蔵水野家旧蔵図書の解説と目録」『國學院大學図書館紀要』第1号)。

④近代以降の新宮水野家と蔵書・史料の動向に関しては、現在新宮水野家の祭祀権等を引き継いでいる結城水野家の関係者に会い、聞き取り調査を行なった。その結果、現在成蹊大学図書館に所蔵されている『丹鶴叢書』の伝来経緯が解明された、同書の調査を継続的に実施した。その結果「丹鶴書院」「新宮城書蔵」「水野氏」の蔵書印のあるもの、表紙が丁字染で、丸に鶴の紋を浮かせた装丁の施されているものが多数あったほか、紀州徳川家の蔵書であることを示す「日和歌山徳川氏蔵」「南葵文庫」などの蔵書印があるもの、また巻末の「売弘所三都書肆」の名により、刊行物であることが判明するものもあることがわかった。

(2) 水野忠央の政治的役割と幕府史料収集目的の解明

①『井伊家史料』『昨夢紀事』や「彦根藩井伊家文書」(彦根城博物館所蔵)から、安政5・6年における水野忠央の動向を分析し、忠央が幕府政治の伝統・先例を重視していたことを確認した。

②和歌山・新宮への出張調査によって水野忠央が詠じた和歌を多数収集できた。『新宮市誌』『旧幕府』などからも忠央の和歌を収集し、人物像に迫るうえで不可欠な要素であることを確認した。

③『南紀徳川史』や「公紀私録」(『丹鶴城旧蔵幕府史料』所収)などを活用して、紀州10代藩主徳川治宝と水野忠央との関係に迫った。結果、忠央は付家老として藩政を指導する立場にありながら、藩主の親政によって藩政に影響力を行使できない状況に置かれていたことを明らかにできた。

④先例や伝統を重視する水野忠央であれば、藩政に関与できない状況を憂えたことは十分に推察でき、それゆえに忠央は幕府の後ろ盾を得て、治宝の藩政に圧力を掛けようとしたのではないかと

の見通しを得た。

⑤「水野家文書」(首都大学東京図書情報センター所蔵)などを調査・検討した結果、水野忠央が老中水野忠邦の古文書・古記録編纂に影響を受け、『丹鶴叢書』の刊行や幕府史料の収集に至ったものと想定できた。忠邦の和歌の師匠であった村田春門の次男が『丹鶴叢書』の編纂に関与していたこと、忠邦の老中関係書類と思われる文書の写しが、忠央収集の幕府史料から見出せることなどから、双方の関係性を想起しうる。

⑥従来の研究では、水野忠央が譜代大名になることを強く志向していたと指摘されてきた。ただ、先例を重視し、藩政を意識する忠央であれば、その解釈をめぐっては再検討を要するのではないかと、今後の課題を見出した。

⑦水野忠央の政治的立場を象徴する大奥人脈については、「尾張徳川家文書」(徳川林政史研究所所蔵)のなかから、忠央と大奥との関係を知りうる新史料を発見した。今後の大奥研究にも寄与するものと考えられるので、今後成果を発表していきたい。

(3) 当史料群に収録されている個別史料の史料学的検討

本課題については、前述の「3. 研究の方法」①②に基づいた『丹鶴城旧蔵幕府史料』の各期刊行の際の解説執筆に伴う研究、及び④に基づく研究会での検討を進めた結果、下記の研究成果を得ることが出来た。なお、成果については今後出版することを予定しており、本報告書では紙幅の関係で全てを提示することは困難であるので、代表的な事例を提示するに留めている。

①発信(大名)・受信(幕府)双方からの文書の流れの解明

第二期において刊行した「一紙目録 奉書 当日奉書」の分析からは、「一紙目録」とは老中の誰の当番のもと、誰から、どのような形で、何が届いたか(献上物の種類、有無等の別)を把握するために、幕府において「一紙目録」と呼ばれる記録が日々作成され、その記録に基づき「奉書」(折紙形式)・「当日奉書」(縦紙形式)等の老中奉書が作成され、献上物等の献上元などに発給されていたことが判明した。また、第三期に刊行した「来

翰留」は、月番老中の元に到来した諸大名等からの書翰等を受理日ごとに書写してまとめたものであるが、本史料の存在により、大名の宗家文書等の関係史料と対照させることで、発給元・返信受信元の大名家文書と受信元・返信発給元の幕府文書とが、一連の流れの中で位置付けることが可能となった。

これらの研究成果により、大名等から発信され幕府が受理したのちに、また大名等に返信される一連の流れの中で、幕府内で作成される記録について、その一端を具体的に解明することが出来たと言えよう。

②幕府の文書に対する意識や整理方法、幕政への活用方法などの検証。

第一期に刊行された「幕府日記」は、幕府役人の奏者番の業務日誌ともいべき記録である。この記録の構造は、前半に「殿中沙汰書」と呼ばれる、日々、幕府内で通達された、その日の予定等を記した文書の内容を記し、後半に、その日の当番であったものが、交代時の引き継ぎ事項等を記したものとなっている。このような記録方法は他の役職でも同様であろうと推測され、且つ、「殿中沙汰書」は後の「柳営日次記」として編纂される情報に繋がっており、幕府組織内で日々作成される業務日誌ともいべき記録の一端を知ることができる。

また、同じく第一期に刊行された「類聚録」は、老中間での申し合わせ事項を記録したものである。これまで藩側の記録により、幕府に届け出た願書や伺い等の分析から老中等の判断した結果については判明してきていたが、本史料の存在によって、老中間でどのような申し合わせ事項が存在し、どのような基準で判断がなされてきたのかの一端が解明され得よう。

さらに、第二期・第三期に多く刊行された、「縁組」「婚礼」「隠居」「出生丈夫」など、各テーマ別に収録された各大名等からの伺いや届書と、それらに対する幕府の回答等についての一連の史料群からは、各大名家と幕府との間に成立していた伺い等を通じた判例の蓄積という機能も見出されている。

以上の諸点を通じて、江戸幕府の新たな文書論・アーカイブズ論を構築することをめざして検

討したところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

- ①松尾美恵子、家光政権期江戸城と江戸の防衛—城門警衛と消防制度の成立—、東京大学史料編纂所研究紀要、査読有、22号、2012、236—248、
- ②松尾美恵子、肥前国小城藩主差控の一件～「例格類聚」より～、古文書を読む解説ノート(NHK学園)、査読有、20号、2011、37—42、
- ③深井雅海、江戸城請取りの顛末、江戸時代の古文書を読む—徳川の明治維新、査読有、2011、18—44
- ④藤田英昭、旧幕臣の駿河移住、江戸時代の古文書を読む—徳川の明治維新、査読有、2011、46—82
- ⑤深井雅海、文久の幕政改革、江戸時代の古文書を読む—幕末の動乱、査読有、2010、16—44、
- ⑥小宮山敏和、近世武士の名と名乗り、古文書通信、査読無、84号、2010、10—14、
- ⑦小宮山敏和、近世前期における江戸城の留守体制、日本歴史、査読有、748号、2010、41—61
- ⑧深井雅海、桜田門外の変と御庭番、江戸時代の古文書を読む—ペリー来航、査読有、2009、114—145、

〔学会発表〕(計7件)

- ①小宮山敏和、近世後期における江戸城の留守体制、関東近世史研究会 2011年度大会報告、2011年10月30日、法政大学、
- ②松尾美恵子、近世前期江戸城と江戸の防衛、シンポジウム 歴史のなかの地図Ⅴ「江戸と江戸城」、2010年9月11日、東京大学山上会館、
- ③深井雅海、附家老について—尾張藩附家老を中心に—、第2回附家老サミット、2010年10月2日、犬山国際観光センター、
- ④藤田英昭、幕末政治の舞台裏—奥女中が見た幕末京都—、日本風俗史学会関東支部平成22年度総大会記念講演会、2010年7月3日、大妻女子大学、
- ⑤松尾美恵子、江戸城における大名の殿席について、真田宝物館講演会、2009年12月5日、長野市松代支所
- ⑥深井雅海、江戸城という政治空間—日常的な政治運営と本丸御殿—『地図史料学の構築』の新展開 2009年度公開シンポジウム、2009年9月17日、東京大学山上会館、
- ⑦藤田英昭、幕末維新期における若狭野浅野家の動向、「旗本浅野家文書の世界—『若狭野浅野家資料』の総合的研究—」フォーラム、2009年12月12日、東京都江戸東京博物館、

〔図書〕(計6件)

- ①深井雅海、吉川弘文館、日本近世の歴史 3 綱吉と吉宗、2012、309頁、

- ②松尾美恵子、ゆまに書房、丹鶴城旧蔵幕府史料第26巻～第35巻（監修・32巻解説）、2010、9-24
③藤田英昭、ゆまに書房、丹鶴城旧蔵幕府史料第35巻（解説）、2010、9-16、
④小宮山敏和、ゆまに書房、丹鶴城旧蔵幕府史料第26巻（解説）、2010、9-11、
⑤松尾美恵子、ゆまに書房、丹鶴城旧蔵幕府史料第16巻～第25巻（監修）、2009
⑥小宮山敏和、ゆまに書房、丹鶴城旧蔵幕府史料第19-20巻（解説）、2009、9-11、9-10、

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松尾 美恵子 (MATSUO MIEKO)
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号：20072423

(2) 研究分担者

深井 雅海 (FUKAI MASAUMI)
聖心女子大学・文学部・教授
研究者番号：60072427
藤田 英昭 (FUJITA HIDEAKI)
公益財団法人徳川黎明会・徳川林政史研究所・
非常勤研究員
研究者番号：70414084
小宮山 敏和 (KOMIYAMA TOSHIKAZU)
公益財団法人徳川黎明会・徳川林政史研究所・
非常勤研究員
研究者番号：40442561